

入選 神奈川県 磯部様（60代 女性）

主人と二人、世間でいう「年金暮らし」の高齢生活者、二ヶ月に一度の年金支給日は二人の大きな楽しみの日である。私達の年金は、生活費に工夫をして、上手に使って余らせ、余った分は積み立てておく。貯まった資金で贅沢さえしなければ、二人して好きな旅行に出ることも可能なのである。つましいけれど大きな喜びも作り出す私達の公的年金である。

最近公的年金の報道を身近に感じるが、27歳で会社を退職した頃の私は、年金の事など全く気にしていなかった。退職して2ヵ月ほど経った頃だったろうか、主人の実家に遊びに行った。彼の父親から「節ちゃん、年金はどうした」と聞かれた。退職金の事は、頭にあったが、年金のことは全く意識せずにいた私は、どうということか逆に質問してしまった。「一時金を貰っちゃったか聞いているのだよ」義父の言葉に状況を理解した。友人達が「年金の一時金を貰った」と話していたことを思い出したのである。「何もしていません」と答え、「それは良い、帰ったらすぐに区役所の年金課に行って国民年金の手続きをきなさい」と指示された。義父は年金の事を説明し、何故一時金を貰うのではなく国民年金に加入したほうが良いのかを話してくれた。

自宅に帰ると、すぐ役所へ出向き、義父の指導どおりに国民年金の手続きを済ませた。40年前の義父の話である。私が三年前に年金をもらうようになった時に義父はすでに亡くなっていたが、的確な助言に心から感謝した。義父の話をしっかり聞いたお陰で、年金支払期間は長くなり、その分私の年金は加算され、主人の年金と合算すると、工夫次第で多少余裕のある生活を送ることが出来る年金額なのである。

私と主人にとって、二ヶ月に一度のお楽しみ「年金の日」のあることは、使い方を一緒に考える会話の時であり、自分達の努力で豊かに過ごす事が出来る。老齢年金から介護保険料がひきおとされるようになって、面倒な支払は無く、老後の心配も若干薄れてきた。贅沢をせずに、健康に注意して過ごせば安穏な毎日につながると楽しみながら二人で努力している、幸せなことである。

我が家の子ども達三人が成長する過程で長男が20歳になった時には、年金の法律が変わっていて、学生でも20歳になると年金の支払義務があった。大学はお金がかかるが、私はすぐに手続きをして支払を始めた。末の娘も同様に支払っ

ていたのだが、学生の彼らは私の若い時と同様、年金の重要性を認識する事はなく「友達に聞いたけど誰も払ってないよ」と支払義務の免除手続きをするようにと勧めた。報道でも、免除の手続きをして支払をしない家庭が多い、と伝えていたが、私は支払を続けた。娘達の意見は、彼らにとって年金は遠い先の話であり、友人たちの状況を私に伝えただけであると理解し、義父から受けた昔話の指導を胸に、子どもたちの忠告には耳を貸さなかった。年金受給の年齢になって、その方針に間違いは無かったと思った。社会人になった息子達は、今自分で公的年金の支払を続けている。

スイスの人と縁あって結婚した娘は、お婿さんからスイスの状況を聞き「日本の年金制度と健康保険制度はとても羨ましい」と話す。自分の国民年金の支払を止めるように、と話した彼女の大きな変化である。日本の社会制度としての公的年金や健康保険制度は、諸外国に誇れるものだと思えて感じた。日本に生まれ年を重ね平和に安定した生活ができる事に感謝である。私達の親も、制度の充実に助けられて老後を過ごした。私達夫婦は、若い世代に仕事を引き継いで、自由な時間を過ごすことのできる年齢になった。これからは、自分自身としっかり向き合い、改めて人生、そして社会のことを考える時間を持ち活動につなげたい。現在の社会は高齢であっても、その力を生かすことの出来る時代となってきた。

現在報道される年金の将来は、社会の大きな変化で不安があり、若い人たちの老後が心配という。老主婦としては、解決への力を持たず、総てがうまく行くようにと祈るばかりである。私達の生活を支えている公的年金の制度が、若い世代の人にも現在と同様、老後の生活を助ける制度であり続ける事が出来るよう、安定した社会が続くその時々で好ましい形での継続を、と心から願っている。若い人たちには、若い時代に公的年金制度をしっかりと受け止め、制度に則って多少苦しくとも支払を続け、豊かな老後を支える公的年金制度の継続と充実への働きかけをして欲しい。長寿国日本の将来は、今後も高齢化が進み、高齢でもその力を社会に生かし、充実した生活を造る事の出来る社会の実現も夢ではない。高齢先進国日本の将来を明るいものにするには、年齢に関係なくみんなの努力、協力で初めて完成するものであろう。

わたしと年金、私は今、誇りを持って「年金生活です」と笑って話す事の出来る毎日を送っている。